

蚕糸研究から 協道にそれて見て

(元農研機構)
行弘 研司



筆者は定年退職してからの7年余り研究からほぼ離れている。そのため、今ここで研究に関わることを述べるには荷が重い。そこで、協道にそれて、最近出会った養蚕、シルク関連の出来事で筆者に気づきを与えたことについて書かせていただく。

まずは、江戸時代、蚕種の販売で藩の台所を支えた富山県富山市八尾町についてである。これは、カイコについて教育を就職以前受けていなかった筆者にとって大変な驚きであった。

2025年6月19、20日にがうん天蚕の会（友咲貴代美会長）の主催で日本野蚕学会大会が開催された。その2日目に見学会が催され、訪れた富山市八尾曳山展示館には、この地の繁栄の証しである曳山祭、風の盆関連の展示が並んでいた。さら奥には、その原資となった養蚕業について展示がなされていた。そこで蚕種の販売が重要な収入源であったことを知ることになった。加賀藩の支藩である富山藩は御多分に洩れず財政難に瀕していた。そこで藩が奨励したものの一つが養蚕であり、元禄年間（1688年～1704年）にさかんになった。ほぼ同時期に蚕種製造が始まった。蚕種は特産の和紙に産み付けら富山の売薬と一緒に販売された。これは、産卵台紙の原型なのだろうか。

八尾の蚕種の販売範囲は、文化年間（1804年～1818年）には全国の1/4に達したという（越中、越後、越前、能登、近江、丹波、丹後、但馬、美濃、飛騨、信濃、尾張、三河、甲斐、武蔵、相模）。この範囲は、孵化するまでに辿り着く領域なのだろう。より規模が小さかったであろう天蚕の養蚕であっても、江戸時代には天蚕卵が広範囲に流通していたという。蚕卵であればさもありませんが、ここまで大規模なことに驚きを禁じ得なかった。

このような八尾の蚕種の隆盛は、富山藩10万石の台所を米以外の年貢として支えた。富山藩は見返りとして八尾の蚕種商人に名字帯刀を許している。明治になって村立の蚕業学校が作られた。曳山展示館はその跡地に建てられている。この学校で江戸時代から集積してきた養蚕に関わる多様な経験知が伝えられていたのであろう。八尾曳山展示館では、郷土の発展に寄与した蚕糸業への敬意が今も脈々と生き続けているようである。

次に東京都日野市で出会った情景についてである。日野市には1980年に筑波に移転するまで蚕糸試験場があった。明治以降、国策として輸出の主要産品として絹生産のため養蚕が奨励された。そのための多方面にわたる研究の拠点として蚕糸試験場が設立された。日野の施設は桑園として出発し、やがて蚕の育種の拠点として発達した。面積が11ヘクタールを超える桑園と共に、6つの実験蚕室が設けられていた。そのうち第一蚕室は昭和7年（1932年）に完成した。そして、筑波への移転する昭和55年（1980年）まで蚕の育種研究の中心であった。筑波移転後、日野の施設は公共施設（日野市立仲田小学校や市民の森スポーツ公園等）に姿を変えていった。その過程で旧蚕糸試験場の建物群は第一蚕室を残して解体が進み、仲田の森蚕糸公園として管理されてきた。第一蚕室が「旧農林省蚕糸試験場日野桑園第一蚕室」として、日野市初の国の登録有形文化財（建造物）に登録されたのは平成29年（2017年）であった。これを受け、令和元年～2年（2019～20）にかけて保存修理工事が行われ現在の姿となった。この間、第一蚕室の活用・保全管理に携わり、登録有形文化財化に尽力してきたのが蚕糸の会・日野（柳元太郎代表）である。仲田小学校の第7代校長であった柳元さんはシルクが明治以来国家に

貢献してきたことと関わってきた人々の努力の継承が教育的価値にも繋がると考え、市と交渉して認められ、桑畑造営、蚕飼育体験学習等に取り組んできた。この事業のため蚕糸の会・日野は蚕糸試験場の旧職員に日野桑園での活動について講演を依頼し、地域と情報共有を図った。また、旧職員に桑畑造営、蚕飼育体験学習等の指導を受けた。

仲田小学校では、蚕糸の会・日野と連携のもと毎年3年生が蚕飼育体験学習を受講している。そこでは、蚕飼育、糸取り、繭人形作りを学んでいる。柳元さんは嬉々として語られた、「蚕の飼育では最初、恐々だった子供がやがて好きになり率先して飼育に携わるようになっていったと。」

筆者は、今回はじめて旧蚕糸試験場日野桑園の第一蚕室が国指定の有形文化財に指定されて、修復保全されていることを知った。見学する機会を得て、保存工事がなった蚕室は板張りの部屋で床暖房によって温度調整を行う施設を見ることができた。このような施設に現在お目にかかることはまれであろう。第一蚕室の1階部分は鉄筋モルタル構造、2階部分は木造で、富岡製糸場に習った構造もっている。昭和7年建築の建物は、建築史的にも貴重であり、このことも有形文化財と認定された所以であろう。この建物が産業遺産として広く知られ有効利用されることを期待するところである。特に蚕糸学会関連で利活用することは有意義であろう。

今ネット上では、「蚕を飼育しよう！糸をとってみよう！紡いでみよう！日本の養蚕業を支えよう！」という動きが見受けられる。自宅で養蚕を体験して、前述の仲田小学校の児童のようにカイコが好きになったことがきっかけに絹の世界に足を踏み入れた人たちがいる。筆者の知るうちの御一方が、福岡県直方市の(株)松田衣料店の内徳直美さんである。彼女は「想ってて護っててずっと持ってて」と願い、絹の「MOTTETE」を立ち上げた。きっかけは「とよた衣の里プロジェクト」のカイコ飼育

体験だった。そして言われた、「お蚕様の生糸と、豊かな感性と技で伝統織物になる絹は、年月を経て更に成熟していくもの」だと。彼女は、110年続く家業の五代目。呉服店に始まり現在は婦人服店。そこには、数百本を超える正絹反物が良い状態で秘蔵されていた。それらを継承し、絹を未来につなぐ使命があるとMOTTETEのブランド事業を始めた。

彼女は、「時代を越えて想いが伝統織物を救う」と題し、2024年度経済産業省 GIRAFFES JAPAN 九州ファイナリストになった。筆者はこの話を知り、嬉しかった。筆者が高校時代に通った直方市の商店街は、もうシャッター街だ。そこに新たな営みが芽吹いたからだ。この夏MOTTETEは、新たな展開を迎えた。台湾に26日間出店したのだ。再生産不可能なヴィンテージ素材、その価値ある新しい正絹反物を無駄なく和モダンにアップデートして生まれた日本製が魅力である。10月は、丹後オープンセンターに出店し、2月は、直方歳時館で蚕と絹で繋がった仲間達と展示会を行う。また、蚕飼育体験の仲間を募集し、養蚕プロジェクトを応援していくという。一人一人の縁を繋ぎ、絹のストーリーを楽しく掘りよるとしている。

今回提供した話題はいずれも、衣料資材としての絹に結びついたものである。いずれもカイコがその一生を終え残していった繭と絹への愛着ないし愛情が芽生えたことに始まる。これこそが数千年の歴史を持つ養蚕にとって重要であろうと思っている。自宅養蚕から自分で糸をひいてみよう、紡いでみようから染めてみよう、織ろうへの広がりを感じている。より多く飼ってより多くの繭を得ようと養蚕農家になられたという話を少ないながらも聞いている。まさにカイコへの愛着と愛情が後押ししている。楽観は憚られるが、芽生えたこの活動が危機の瀬にいるという養蚕業の新たな展開への胎動であればと期待される場所である。